

北冥の魚

野村胡堂

一

「江戸中の評判なんですがね、親分」

「何が評判なんだ」

ガラッ八の八五郎が、何にか変なことを聞込んで来たらしいのを、銭形の平次は浮世草紙うきよぞうしの絵を眺めながら、無関心な態度で訊き返しました。

「両国の女角力おんなずもうと銭形の親分」

北冥の魚

「馬鹿野郎、俺を遊ぶ心算か」
つもり

平次は威勢の良いのを浴びせて、コロリと横になります。こうすると軒に這わせた、貧弱な朝顔がよく見えるのでした。

「へッへッ、怒っちゃいけませんよ。ところでね、親分」

「何んだい、うるさい野郎だな。少し昼寝でもさしてくれ。——
女角力を毎日覗いているような日出度い人間とは付き合いたく
ねエ。木戸銭だつてまともに払っちゃいないだろう」

「冗談じゃありませんよ。女角力を見たのはたった三遍べんだけです

よ」

「三遍見りやたくさんだ」

「四遍も見ると、噓くさまが出る」

「呆れた野郎だ。そんなものへ俺を引き合いに出すのか」

「そんな心算つもりじゃありません。ね、親分、女角力はちよいと話のキツカケをつけただけで、今日は親分の学がくの方を借りに来たんですかね」

「ガク？」

「学問ですよ、親分」

「大層なものを借りに来やがったな。そうと知ったら、昨日きのうあたり二三百文ほど仕入れておくんだったよ」

平次は仰あおむ向けに寝たまま、面白そうに笑っております。

「ね、親分、ひらめという字を知っていますか」

「ひらめやかれいに付き合うなぎいはないよ。鰻という字と、鯨くじらとい

う字なら看板かんばんで見かんて知しつてるが、それでも間に合あわせるわけには

行かいねエのか」

「ひらめですよ、親分。——日比魚ひびうおと三字でひらめと読よむか読よま

ないかてんで、大お変な騒さわぎですよ」

「フーン」

平次は一向いっ気きの乗のらない様子ようです。

「町内の手習て師し匠じやうに訊きくと、ひらめを四角し角かくな字じで書かくと比目魚ひ目め魚ぎよと
なる。魚扁うおへんに平へでひらめだが、日比魚ひ比ひ魚ぎよと書かいてひらめとは読よまな

い——とこうなんで」

「それで解ってるじゃないか、俺の学なんか引合いに出すことがあるものか。魚扁に平はひらめさ、魚扁に丸くて長いのはどじょうで、魚扁に骨張っているのはほうぼう、物事はみんな理詰めだ」

「ところで遺言ゆいごんには日比魚と書いてあるんで。これは聖堂へ持つて行つたつて読めないから不思議じゃありませんか。これが読めると、何万両という金になるんだが——」

「大層な事を言うじゃないか、日比魚が何万両になるといふ話をもっと詳しくくわ話して見るが宜い」

平次もとうとう坐り直しました。ガラツ八の話術は近頃は一段

と冴えて、とかく不精になり勝な平次を事件の真ん中に誘い込む
コツを心得ているのです。

二

木場の旦那衆で、上州屋莊左衛門そうざえもんが死んだのは、もう半歳も前
のことですが、その蓄財ちくざい——どう内輪に見ても、三万両や五万両
はあるだろうと思われたのが、不思議なことに、何処どこを探しても
小判一枚出て来なかつたのです。

裕福な上州屋のことですから、御得意に大名方も三軒五軒、手

持ちの材木もうんとあり、遺族いぞくが困るの、店がどうのという事はなかつたのですが、ともかく、うんとあるだろうと思われた現金がほんの当座の帳面尻を合せるだけ、二つの錢箱に少々ばかり入っていたのでは、身寄とう一統、奉公人も世間の人も承知しません。半年の間、番頭の有八さいはいが采配をふるつて、文字通り床を剥がし、壁まで落して捜しましたが、小粒一つ出てこない有様です。こんなことで倅の莊太郎——今は上州屋の跡取りが、行儀見習いいなずけという名目で、上州屋へ入って待機している武家出の許嫁お道と祝言も出来ず、店の支配人をしている伯父の常吉、その娘のお信、莊太郎の弟の勇次郎まで、妙にこう対立的な氣持で、不安のうちに半

歳を過してしまいました。

先代莊左衛門が生きているうちは、深川一円の評判になったほどの平和な家庭ですが——少なくとも見積もっても三万両の現金は、誰の手に入るだろうか——どうかしたら、誰かもう奪ってしまつたのではあるまいか——と言つた疑いが、家中の空気をすつかり険悪にして、近頃はお互に隠し合つたり、睨み合つたり、何時何処で、どんな爆発的悲劇が起らないとも限らない情勢だったのです。

「何にか手掛りはないのか」

一と通りの説明を聴くと、平次はこう手繰たぐりました。

「それが、そのひらめ、

「ひらめじゃない日比魚ひびうおだろう」

「何んだか知らねえが、死んだ荘左衛門の手文庫の中に、この三字が書いて封じたのが入っていましたよ。上書は跡取りの倅の名前——荘太郎殿——他見無用と断つてあつたが、荘太郎は人が良
いから皆んなに見せてしまった」

「フーム」

「何しろ荘左衛門という人は、町人のくせに学問が好きで、小唄も碁将棋ごしょうぎもやらないかわりに、四角な文字を読んで、唐からの都々逸どどいつを作った」

「唐の都々逸てえ奴があるものか、詩だろう」

「その詩とか五とか言うのを高慢な友達とやり取りして喜んだという変り者だ。遺言だつて並大抵の仕人物しいれものじゃ気に入らねえ」

「外に何んにも言わなかつたのか」

「卒中で一ぺんに片付いたんだから、長々と弁べんずる隙ひまがなかつた」
八五郎の話は、途方もない話術ながら、面白く筋を運んでくれました。

「それをお前は、誰に頼まれて乗出したんだ」

「番頭の有八ですよ——尤ももっと若主人の莊太郎も承知の上だと言

いましたかね」

「宝捜しはイヤだが、ひらめから三万両手繰り出すのは面白いな」
「やって下さいよ、親分。うまく三万両見付かりやひと身上出ししんしょうしても宜い——つて番頭の有八が——」

「馬鹿野郎」

「へエー」

「金で人を釣つて、三万両捜させようなんて、太い野郎だ」

「あつしじゃありませんよ、そいつは有八の言い草だ」

「だから断つて来な。馬鹿馬鹿しい」

平次の癩かんにさわるのは、報酬ほうしゅうに物を言わせようとするタチの

人種——どんな事でも金さえ出せばの氣でいる人間でした。

「驚いたなア、どうも」

「驚くことはあるめえ。ひと身上になるじゃないか。お前が勝手にやるが宜い」

「へッ」

ガラツ八は面喰らって飛出してしまいました。身上を拵こぎえる気のないものは、どうも付き合いきれないとも思ったのでしよう。

三

それから二日目。

八五郎は『大變』の旋風せんぷうを起して飛び込みました。

「さア、大變ツ、親分」

「また眼の色を変えて飛び込んで来やがる。御町内では馴れっこだが、江戸中大變を触れて歩かれた日にや皆んな胆きもを潰すぜ」

「大丈夫、路地へ入るまでは、大變の夕の字も言わねえ。——何しろ大變ですぜ、親分」

「三万両の大判小判が見付かって、お前がひと身上しんしやう拵こしらえたとしてもいふのかい」

「冗談——そんな気楽なんじゃありませんよ。何しろ人間が一人殺されたんで——」

「何んだと、八」

「だから、あの時親分が乗出しや、こんな事にならずに済んだのに、——親分は妙に意地っ張りだから——」

「まア、おこ憤るなよ、八。誰が一体、どうして、誰に殺されたんだ」
平次は八五郎の鼻息の荒さに苦笑しながら、事件の興味ひきずに引摺られて行く様子です。

「それが解っていりゃ、深川から此処ここまで飛んで来ませんよ」

「ホイ、また叱られたか。それにしても殺された人間は解るだろ
う」

「殺されたのは、若主人莊太郎の弟で、勇次郎という二十二にな

る男。——少し足が悪くて、あまり外へは出ないが、知恵の方なら人の三倍も持っている男だ。——殺したのは判らねえが、あれは鬼だね親分」

「とら虎の皮の禪かわか何んか落ちて居たのか」

「そんな証拠は残さねえが、首を絞しめて殺した上、生き返っちゃ悪いと思つたか、げんのう玄能で頭を叩き割つて行つた」

「フーム」

「だから親分、ひと身上しんしやうになるとは言わねえ。御上への御奉公、役目の表、一つ行つて見てやって下さい。下手人げしゅにんが拳がつて三万両の金が出た上、強たつてお礼をやるというなら、あつしが貰つて

家作を四軒建てる——」

「四軒は変だね」

「一軒には親分を入れて、一軒にはあつしが入って、あとの一軒には叔母さんを入れる。家賃なんかみろく弥勒の世までも呉れとは言わねえ」

「それじゃ三軒じゃないか、あとの一軒は？」

「へッ、へッ、そいつは言えねえ」

「馬鹿だなア」

そんな無駄を言いながらも、平次はついガラッ八におびき出されて、木場の上州屋まで行ってしまいました。

その時は土地の岡っ引が三人、喜八に宗助に吉五郎というのが、宜い加減かき廻しておりましたが、さて何が何やら一向解らず、誰を縛つたものだろう——と言つた、御上向きのおかみ体裁を考えて小田原評定に時を過していたのです。

「おや、銭形の」

吉五郎は一番先に、ガラツ八の案内で乗込んで来た平次を見付けて、ホツとした様子でした。

「八五郎に聴いたんだが、変なことがあつたそうだね」
平次は如才じよさいなく三人に挨拶しました。

「まア見てくれ。銭形の兄哥なら見当が付くかも知れないが、何

しろ大變な殺しだ」

吉五郎は先に立って、勇次郎の部屋へ案内してくれます。

おもや

母屋から離れた二た間の一軒建で、もとは材木小屋の見張りに使った奉公人の住いでしたが、足が不自由で少し変屈へんくつで、学問にばかり凝こっている勇次郎は、多勢の家族といっしょに住んでいることを嫌ってここで若隱居ゆうゆうのような、悠々ゆうゆう自適じてきの生活をしているのでした。

「錢形の兄哥も聴いた筈だが、何んでも三万両とか五万両とかの、金のゆくえが判らないんだってね」

吉五郎はくすぐ擽たつ度い顔をして見せます。

「そんな事を八が言つて居たよ」

「その三万両——まあそれくらいはあるそうだが、何しろあんまり金高が大きいので、こちらには見当も付かないが、それだけの金が財布やたんす筆筒へ入るわけはない。——」

「なるほど、財布や筆筒へは入らない——さすがにあにき兄哥はうまいところに気が付いたね。千両箱が一つ五貫目あるとしても三万両で百五十貫だ。それ程の大金がどこにあるのか判らないと言うのは可笑しいじゃないか」

「ところで昨夜ゆうべ判つたんだ」

「へエ——」

れると言え、明日にも教えてやる。足が不自由だから、俺には引出せない——とこう笑いながら冗談見たいに言つたんだそうだ」

「引出せない——と言つたんだね」

「そうだ。十人も人間が聴いていたんだから間違ひはない。弟の自慢を聴いて、一番喜んだのは兄の莊太郎だ。——それは有難い。お前には一生困らないだけの事をしてやりたいと思つていたから、三万両の半分なんてケチな事を言わなくても宜い。俺が継いだ上州屋の暖簾のれんと身上は三万や五万じゃないから、お父さんの隠して置いた金が見付かったら、それをお前に皆んなやろう——

と言い出したんだそうだ」

「フーム、馬鹿か豪傑か、仏様だね」

「唯のお人好しさ」

そんな事を言っているうちに、先に立った八五郎は、中から勇次郎の部屋を開けて、縁側に立った平次に、さんたん惨憺たる有様を一目に見えるようにしてやりました。

四

はなれ離室は戸締りが無かったので、案内知った者なら誰でも自由に

入れたのです。

平次は部屋の四方から、家の構造をひと通り見て、地理的な関係を胸に畳んでから、膝いざ行るように入つて、惨憺たる死骸を、恐しく丁寧に見ました。まず死骸の側に投ほうり出してある玄能を見、首に巻付けた恐しく頑丈な綱を見、それから死骸の髪はえぎわの生際、眼瞼の裏、鼻腔びこう、唇、喉などとひと通り見終つて、何にかしら腑ふに落ちないものがあるように首を捻ひねります。

「八、そのこの戸棚と押入を見てくれ。酒の道具か、徳利のようなものはないか」

「何んにもありませんよ」

と八五郎。

「お勝手がなくて、食物は母屋から運んでいたんだそうだよ。母屋へ行って晩飯をやったのは、金の見付かった祝心と、皆んなをびつくりさせる心算つもりだったんだろう」

吉五郎は注ちゆうを入れました。

「晩飯の後で、母屋からここへ食物か呑物を運んで来なかったか、——誰か用事か何にかで来たものはないか、——ゆうべ飯の後で外へ出た者は誰と誰で、出なかった者は誰と誰か、くわ詳しく調べて来てくれ」

平次は八五郎に細々こまこまと言いつけて、それから今朝死骸を見付け

たという、番頭の有八を呼びました。

「親分さん、御苦勞様で——私は有八でございます」

狐のような感じのする男です。

「いつか八五郎に——三万両の金を捜し出してくれたら、ひと身しん上しょうやると言ったのは、お前さんだね」

「いえ、そんなわけじゃございませんが——」

有八は恐しくへドモドして居ります。三十七八の、材木屋の番頭だけに、小力のありそうな立派な身体です。

「ゆうべ飯の後で外へ出なかつたのか」

「何処へも出ません。店先で手代の与三と若吉を相手に下手将棋へほしょうぎ

を六番も指しました」

「寝たのは？」

「亥刻過ぎでございました」

「お前は幾番指して、幾番勝ったんだ」

「与三と二番指して二番とも負けました」

「与三と若吉は？」

「二番ずつ指し分けになったようで」

そんな事を聴いたところで何んの足しにもなりません。

魚の冥北
母屋へ行って支配人の常吉に逢って見ると、これも恰幅の好い五十男で、ひどく甥おいの勇次郎の死んだのが打撃だったらしく、大

きな身体で打萎うちしおれているのは気の毒でした。

「実はね親分、従兄いとこ妹同士だけれども、私の娘のお信といっしょにして、末長く見て貰う筈でしたよ。足は悪かったが、知恵たくの逞ましい、良い男で——」

そんな事を言うのです。昨夜は店から一步も外へ出ず、奥で甥の莊太郎と話しふかして、そのまま寝て了しまったという言葉に嘘があらうとも思われません。

若主人の莊太郎は、典型的な若旦那の生長したので、人の良いという外には何んの取柄があらうとも思われません。

「可哀想なことをしました。私が金を見付けたら皆んなにやると

「言ったのが悪かったのかも知れませんが」

そんな事に気の付く二十五歳の若主人が、決して馬鹿や豪傑でないことは、平次も承認しょうにんしないわけには行きません。

「そうとも限りませんよ。——ところで、勇次郎さんは、余っ程学問があつたようですね」

平次は外の事を訊ねました。

「父親は逍遙軒しょうようけんと言って、詩しも作り歌もよみました、私はその方は一向いけません。弟は父親の学問好きを承うけて、これも四角な字を読んで居りました」

魚の冥北

おおだな
大店の主人らしい寛達かんたつさはありますが、弟の伶俐さを自慢にす

る人の良さ以外に、この莊太郎には大した取柄のないことがよく判ります。

つづいて若吉に逢い、与三に逢い、常吉の娘のお信に逢いました。これはまた恐しいお俠きやんで、

「父さんはあんな事を言うけれど、私は勇次郎さんは大嫌い、歩くと唐臼からうすを踏ふむようなんですもの。——でも殺されてしまつちや可哀想ねえ。早く下手人げしゅにんを挙げて下さいよ。物置から材木を引上げる時に使う五六間もある大綱を持出して絞め殺すなんて、随分ひどいじゃありませんか」

平次は何んにも訊かずに逃げ出してしまいました。

最後に逢ったのは、若主人莊太郎の許嫁で、客分あつかいで祝言の待期をしているお道という娘でした。少し老けて二十二、色の浅黒い、眼鼻立のよく整った、華奢な身体で、物腰しの上品さも物言いの聰明さも、上州屋の嫁として全く申分のない娘です。

「ゆうべ外へ出なかつたでしような」

平次の調子も、相手の品位に押されて物静かでした。

「ちよつと出かけました」

お道の言葉は予想外です。

「何処へ——」

「勇次郎様にお茶を差上げました」

「――」

「若旦那も御承知の上でございます。勇次郎様は御酒を召上らないので、ときどき薄茶うすちやを欲しいと仰しゃいます」

「？」

「ゆうべも晩の御飯が済んでお帰りの時、後でお茶が欲しいが――と遠慮しいしい仰しゃるので、下女の初やと一緒に離屋はなれへ参つて、薄茶を一服差上げて帰りました」

勇次郎に逢つた最後の人でしょう。でも下女と一緒に行って一緒に帰つたという娘――この静かさと聰明さには、何んの疑問を挟む余地もありません。

下女のお初を呼んで訊くと、正にお道の言つた通り、勇次郎の望みで、莊太郎の許しを受けて離室へ行き、薄茶を立てて、四半刻ほど経つたというだけの事でした。

五

「親分、晩飯の後で母屋おもやから出たのは、あのお道という娘一人ですよ」

八五郎の報告は平次の調べとピタリと一致しました。

「それで宜いよ」

と平次。

「尤も皆んな寝鎮ねしずまってるから、脱出もつとそうと思えば、誰でも自由に脱出せませんがね」

「それも解ってる」

木場から引揚げて、平次と八五郎は永代橋を渡るのでした。

「それじゃ下手人も解ったんですか、親分」

「解つった心算もりだが、証拠が一つもない」

「誰です、親分」

「お前が考えたこともない人間だ。——その癖恐ろしい人間だよ」

「へエー」

「ところで、莊太郎とお道がなぜ祝言せずにいるか、本当のわけをお前知ってるかい」

「宝搜しのゴタゴタで——」

「そんな事もあるだろうが、本当のところは、あの祝言の邪魔じゃまをしている人間があるんだ」

「へエ、そんな野郎が居るんですか」

「野郎じゃない女だ、——お信が莊太郎の嫁になりたかつたんだよ」

「へエー、あの転婆娘がね」

「それに親の常吉もその気だったかも知れない。勇次郎と一緒に

したかつたと言つたのは嘘だ」

「成程ね」

「それから殺された勇次郎も、兄貴とお道の祝言には水を差して
いた。兄貴は人が好過ぎるが、お道は人間が伶俐りこう過ぎる。どうも
二人は一緒にしても仕合せになりそうもない——と言うんだそ
うだ。これは奉公人が皆知っている」

「成程ね」

「それに番頭の有八も——」

「それじゃ店中皆んなじゃありませんか」

「でも本人同士は好きで好きでたまらないようだから、いづれ近

「うちに祝言するだろうよ」

「おや？ 親分、何処へ行くんで？」

「八丁堀へ行って見るよ」

「へエ——」

「あの殺しは、俺には解らない事だらけだ。笹野の旦那にお目にかかってお知恵を拝借しよう。学者という奴は、こちとらには苦手だね」

平次はそんな事を言いながら、与力筆頭笹野新三郎の組屋敷を訪ねたずました。

「平次か、だいぶ顔を見せなかつたな」

新三郎は若くて寛達で錢形平次の庇護者ひごしゃでした。

「旦那、お知恵を拝借に参りました。今度ばかりはまるつきり見当も付きません」

平次は笹野新三郎の学問と人柄には、日頃から推服すいふくしきつていたのです。

「お前に解らないことが、俺わしに解る道理はないよ。——だが、どんな事なんだ」

「ゆうべ殺しのあつた上州屋は、三万両からの金を遺のこして、その場所を誰にも教えずに死んでしまいましたが、手文庫の中の俵に宛てた遺言状らしい手紙に、日比魚ひ、ひ、い、ことたった三字だけ書いてあつ

たそうです。これが大金の隠し場所を教える文句に違いありませんが、困ったことに、こちとらでは一向解りません」

平次はさすがに打ちひしがれた調子です。

「待ってくれ。そいつは俺にも解りそうもないが、上州屋の名は何んとか言ったな」

「莊左衛門で御座います。四角な字を読むのが好きで、詩しとか五とかを作つて、逍遙軒しょうようけんと名乗つたそうで——」

「逍遙軒莊左衛門か。——成程」

笹野新三郎は首を傾かたむけました。

「日比魚は比目魚か何にかで？」

「大違いだ。——その日比魚というのは、どうかしたら、魚扁に日比と書いた字を崩したのではあるまいかな。——魚扁に日比なら鯤こんという字だ」

「へエ——そんな字がありませんんで？」

「あるよ。上州屋が逍遙軒しやうようけん莊左衛門と名乗るから気が付くんだ。

あの鯤こんという言葉は、支那の莊子そうしという本の一番始め、『逍遙遊

第一』というところに出ている。その文句は『北冥ほくめいに魚あり、その名を鯤となす。鯤こんの大きさその幾千里なるを知らず』と——ある」

「つまらねえものを引合に出したもので——」

平次は口惜くやしそうでした。

「その後がまた面白い」

「へエー、もう少し読んで下さいませんか」

「つまり、その鯤くじらという鯨くじらのような魚が、鳥になって今度は鵬ほうというものになり、南冥なんめいというところに飛んで行く、——南冥は天てん池也ちなりと断つてある、つまり天の池だな」

「すると鯤の住んでいる北冥ぺいめいというのは何でしょう」

「北の海だ、冥めいは溟也めいなりとある。——その北の海に鯤こんという魚が居るのだ」

「すると、北の海を捜しや宜いわけですね」

「その通りだ」

「有難うございます。どうも学問には叶かないません。尤もこれだけ
付け焼刃の知恵でも持って行けば、もう悪賢こい下手人なんか
は負けません」

平次は独り言をいいながら、新三郎の前を退しりぞきました。

六

「八、解ったぞ」

「親分」

室の外で待っていた八五郎は、平次の顔に動く勝利感を見て、

ホッと安心したのです。此処へ来るまでの平次の顔色は全く今まで八五郎が見たこともないような険悪なものでした。

そこから木場きばへ引返したのは、もう夕陽が町を染める頃。

「この家の北の方には何があるんです」

平次はいきなり支配人の常吉にこんな事を訊きました。

「北海庵という庵室ですよ、——兄が寄進して十五六年前に建てた堂ですが、庵主が死んで、そのまま立ち腐れ同様になっていますが——」

「其処だ」

平次が飛付こうとするのを、常吉はあわて加減かげんに止めました。

「其方そっちからは行けませんよ。厚い生垣いけがきがあつて、北へ行くには南の方へ出て、屋敷をグルリと一と廻りするんです」

争うべき筋合もないので、平次は常吉の導くまま、生垣をグルリと廻つて、裏口へ出ました。

おびただしい材木を漬けた堀の縁を通つて、北側の庵室——北海庵の前に立った平次は、あまりにも荒れ果てた様子に、少なからずがっかりさせられた様子です。

「親分、北冥ほくめいの魚でしょう。鯉でも鮒ふなでも構わないが、此処さかなに魚がありさえすりゃ、三万両と転げ込むんだが、無住になつた寺方じゃ、鰯いわしの頭もねえ——」

「黙らないか、八」

平次は八五郎の饒舌じょうぜつを封じて、凝じつと庵室の中を見廻しました。

「だって親分、ここに魚なんかいるわけはないじゃありませんか」

「あれは何んだ」

平次の指は真つすぐに、仏壇の前に据すえた禿はげちよろの木魚もくぎよを指さしているのです。

「なるほど木魚とはよく附けた——魚に違ちがえねエ」

八五郎は飛んで木魚を押えました。こいつが下手人ででもあるかの意気込みですが、禿はげちよろの木魚は八五郎が考えた業わざをする

魚の冥みやう北

代物しろものとは思えません。

「木魚の中を見るんだ」

「へエー」

引っくり返すとカラカラと鳴って、やがて転がり出たのは、丈夫そうな鍵です。

「それをどうするんで、親分」

「南冥なんめいへ行くんだ。天池てんちともいう。——そこに鵬ほうという鳥ぎょうずいが行水ぎょうずいを使っている」

その時は、もう上州屋の家族が全部そこに集まって、銭形平次の動きを好奇と、不安とで見詰めておりました。

平次はその人達の視線に送られて、上州屋の離屋——ゆうべ勇

次郎が殺された部屋の前まで行くと、ささやかな池のほとりに据えた、不似合に大きな青銅の水盤すいばんに気が付きました。その形は多少怪異なものですが、水盤の真ん中に立ったのは、正しく鳳凰ほうおうの飛躍的な姿です。

平次はその鳳凰の飾りを抜くと、その下にある鍵穴に、木魚から取出した大鍵を入れました。見当さえ付けば謎を解くのは大道を行くようなものです。

カチリと音がして、平次の手に従って巨大な水盤は動きます。その跡にポカリと口を開いたのは何と人間が二人くらい楽々と通れるほどの大きな穴、しかも夕陽に照らされて、階子段はしごたんまでが

ありありと見えているではありませんか。

「御主人はこの中へ降りて見て下さい。中には三万両の小判がある筈だ。穴倉あなぐらはちょうど池の下になつているでしょう」

「――」

莊太郎はさすがに脅おびえて尻ごみしました。

「もう危ないことは少しもありません。あつしが一緒に行つて上げましょう」

提灯を借りて先に立ちました。

つづいて若主人の莊太郎。



©2017 萩 柚月

やや暫く降りると、三畳ほどの小さい部屋になって、四壁にぎっしりと千両箱が積んであります。その数はぎつと三十七八。

「これを皆んな弟にやる心算つもりだったのに」

莊太郎は暗然としました。

「御主人、あなたは仏様のような方だ。その心掛が、あなたを救つたんですよ、それ——」

平次が指さした壁の上、ちょうど二人の帰り途を塞ふさぐように、どつと一条の巨大な水柱が奔出ほんしゅつして来たのです。

「あッ」

驚く莊太郎を、平次は軽く押えました。

「もう大丈夫、それ水が止まったでしょう。八五郎が悪者を捉まつかえたのです」

「帰りましょう。親分」

「もう帰る途も開いた筈です」

「えッ」

「二人ここで三万何千両の小判と一緒に水漬りになるところでしたよ」

平次はそう言って、莊太郎を促うながしながら、もとの離屋の前へ帰りました。

「親分」

ガラツ八は飛付きました。

「下手人はどうした」

「あの女ですよ。あんまりびっくりしているうちに、あの女が穴の入口を塞いで水門を開いたんです」

「だからあれほど気を付けるようにと言つて置いたじゃないか、下手人はどうした」

平次は何も彼も見徹していたのでしょうか。

「少しの手遅れでした」

「何処だ」

「離室へ飛んで戸を閉めてしまったんです」

「それも宜かろう。が、放って置けない。さア」

平次は八五郎らと力を合せて、離室の戸を打ち破りました。中へはいると、

「あつ」

血潮の海の中に、莊太郎の許嫁いなづけお道は、懐剣で見事に自殺して
いたのです。

×

×

帰る途々、ガラツ八の燃える好奇心に釣つられて、平次は簡単に説明してやりました。

「勇次郎の死骸は、殺し方があんまり念入り過ぎたので、毒害どくがいし

たのを誤魔化ごまかすためだと思つたよ。瞳孔どうこうが散っているし、絞め殺したにしては上氣していないし、舌の色が變つて居るし、毒害は間違いないと思つた」

「――」

「それをわざと物置から持出した大綱で絞めて、玄能げんのうで頭を割るのは細工が過ぎて本當らしくない。自分の非力を隠して、どこまでも他の男がやったように見せる気さ。――俺は最初から女の毒害と思つていたな」

「へエー」

「ゆうべ、晩飯の後で離室へ入つたのはお道だけだ。下女といつ

しよに行つて、茶を立てたのを隠そうともしなかつたのは、あの女の太ふといところさ。そのとき勇次郎の口占くちうらを引いて、謎の意味を大方覺つたに違いない——お茶に入れた毒に當つた頃もう一度そつと行つて、いろいろの細工をしたのは、恐ろしい胆つ玉だ」

「なんだつて女のくせに勇次郎を殺す氣になつたのでしょう」

「勇次郎がお道の性根を見抜いて、兄に祝言をさせないように仕向けていたんだらう。それに三万両の大金を勇次郎が見付けると、人の好い莊太郎は皆んなやると言った。——お道にしては、ゆくゆく自分の物になる金を、みすみす勇次郎に横取られるような氣だつたんだらう」

「そんなに解っているなら、なぜもつと早く縛らなかつたんで——」

「証拠が一つもなかつたよ。あのお道というのは、恐しい女だ。

——そこで、笹野の旦那に教えて頂いて、三万両の謎なぞを解き、次第次第に金の隠し場所に近づきながら、お道の顔色を見ていたのさ。お道はあの晩、勇次郎から何もかも聴いているに違いない。

勇次郎は学問はあつたが物を隠しておけない気楽な気性の男だった。——宝の穴庫あなぐらへ主人の莊太郎を誘さそい入れたのは、お道に

細工をさせて、動きの取れないところを押えるためさ」

「へエー」

「それをお前がへマして、殺してしまっっちゃ何んにもならない」
「相済みません」

ガラツ八はペコリとお辞儀をしました。

「まア宜いやな、その方が反かえつて宜かつたかも知れない。三万両
出て見ると、ひと身上呉れるとは誰も言わないだろうよ。後で五
両や三両のお礼を持って来たつて、手を出すんじゃないよ。――
お前が家作を四軒建て兼ねたのは気の毒だが、まアあきいまア諦めるが
宜い」

「へッ」

「家賃の苦勞をするのも、世渡りの張合いになつて悪くないよ」

平次はそんな事を言いながら夕闇の町を神田の家へ急ぐのでした。

そこに女房が、一合工面くめんして、首を長くして待っているのです。

(編注)

作品中には、身体障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

北冥の魚

初出―「オール讀物」昭和十五年九月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第六卷
河出書房
昭和三十一年七月三十日初版

編集・発行 錢形俱樂部



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>